発行／独立行政法人国立病院機構岡山医療センター　2008.5.　Vol.3 No.1

Information magazine

ザ・ジャーナル!!

“やさしさ便り～岡山医療センターの今”

Vol.3 No.1
春号

URL http://www.hosp.go.jp/~okayama/　E-mail info@okayama3.hosp.go.jp

CONTENTS

This is our hospital●センターTOPICS ―― 2.3
ジャスト ナウ● 循環器系特集 ―― 4~6
●淳ちゃんのワンポイント手話 ―― 6
●私の趣味 ―― 6
シリーズ●岡山医療センター物語 第9話「がんを体験して」―― 7
●がん相談支援センター始動 ―― 7
●病院活動案内 ―― 8

写真 | 心臓血管外科手術

地域医療支援病院・がん診療連携拠点病院

岡山医療センターの理念

―人にやさしい病院― をめざして
―Human Friendly Hospital―

1：患者さまにやさしい病院を目指します
2：病院で働く人にやさしい病院を目指します
3：地域の人にやさしい病院を目指します

センターTOPICS

新皮膚科医長のごあいさつ　皮膚科医長　西原　修美

4月1日から皮膚科医長を仰せつかりましたが、仕事内容が今までと特に変わったわけではありません。今まで同様、接触皮膚炎、化粧品皮膚炎、アトピー性皮膚炎（乳幼児、成人）、食物アレルギー、薬疹などの皮膚アレルギー性疾患を専門分野としていますが、一般皮膚科すべても担当させていただきます。

また今までどおりビオチン欠乏症による皮膚疾患の研究も続けておりますので症例がありましたらぜひみせていただきたいと思います。

新脳神経外科医長ごあいさつ　脳神経外科医長　難波 洋一郎

前任の久山医長の退職に伴い4月から医長をさせていただくことになりました。最近の内科的治療の進歩普及にともない脳神経外科が扱う脳血管障害は減少傾向にあるようですが、依然としてその死亡率、重症度は高くとどまっているのが現状です。予防的外科治療の可能性を念頭に、診療ガイドラインをスタンダードとするのみでなく患者さん個々に応じたオーダーメードの医療を行いたいと思っております。SCU（脳卒中ケアユニット）開設以来、急性期患者さんの受け入れもさらに円滑になっております。偏頭痛から脳腫瘍まで、スタッフ一同、良い意味でのgeneral neurosurgeonを目指しております。

新任Drご紹介

本年2月以降新しく着任したDrの紹介です

外科医師　藤原　拓造

本年2月初めより外科に勤務しております。昭和59年の卒業で腹部一般外科,腎移植などに従事してまいりました。今後,腎移植など腎不全の外科治療を中心に行う所存です。宜しくお願いいたします。

皮膚科医師　山崎　修

平成5年医学部卒業。専門分野は皮膚細菌感染症、皮膚悪性腫瘍です。将来的には皮膚の悪性腫瘍の拠点病院を目指して努力していきたいと思います。皮膚のことなら何でもお気軽にコールしてください。

循環器内科医師　宮地　晃平

平成9年、医学部卒業で循環器内科一般、不整脈が専門です。

初心を忘れず、丁寧な診療を心掛けたいと考えます。循環器内科には宮地医師が二人になり、混乱するかもしれませんが、宜しくお願い致します。

小児外科医師　中原　康雄

平成12年、医学部卒業。専門は小児外科全般ですが、特に先天的な腸管の病気に興味を持って勉強しております。病気のお子様に最良の医療を提供できるように日々努力していく所存ですのでよろしくお願いいたします。

小児外科医師　高橋　雄介

平成13年、医学部卒業で小児外科、小児泌尿器科が専門です。

病気に苦しむ多くの子供たちの力になれるよう日々診療に励む所存でありますので、なにとぞよろしくお願いいたします。

消化器科医師　江原　弘貴

平成15年卒の消化器科の江原と申します。この4月より長島愛生園との併任で常勤として勤務することになりました。

この度の異動を一つの機会としてこれまで以上に精進していきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

開院記念日特別講演

武田邦彦先生を迎えて

乳腺甲状腺外科　臼井　由行

平成20年4月1日の開院記念日に、中部大学教授の武田邦彦先生が来院されました。

「環境問題を斬る」

現在、21世紀になって、人類が大量に地球の資源を使い放題の結果、地球の資源が枯渇しつつあり、地球が温暖化に向かって、海水が上昇し、大都市が水没するという、シナリオ。それを盲目的に信じさせられている我々を、あれ、本当だろうか?と疑問をもたせてくださいましたのが武田先生でした。

武田邦彦先生は、テレビの『たかじんのそこまで言って委員会』に出演してブレイクして有名になったようです。私もテレビを見て、本当におもしろいことを言う人だなあという感想でした。その番組に2回出演されたようです。その先生が病院に講演に来られるとのことで、本屋さんに行き、先生の環境問題のウソのことを書かれた本を2冊購入して、読みました。なるほどこうだったのか?と目からうろこのようでした。そこで、先生のお話を楽しみに待っていました。

今、地球が温暖化に向かっているかどうかは、未来のことでわからないのが真実のようです。また、北極の氷が解けても、水面は上がらない。アルキメデスの原理で。温暖化すれば南極に雪が降るので南極の氷が増えるというのも面白かった。また、アメリカのゴア氏が、温暖化が進めば海面が6m上昇する。というのも、6000年後には、というのを故意に省略した、政治的意味合いの濃いメッセージであったというのも、面白かったです。それに踊らされたマスコミ、

日本政府は情けないかぎりです。結局のところ、将来のことは、わからないということです。最近の『文芸春秋』には、地球は寒冷化するというのもあります。今は、間氷期で、氷河期が来て、寒冷化するほうが、作物が育たないのでよっぽど怖いそうです。

しかし、石油がなくなるのは、確かなことであり、我々は次世代の資源を開発しなくてはならないとのことでした。節約しても、いずれはなくなる。未来を開くためには節約してはならない。未来のために投資しなくてはとの、1897年、沖ノ島炭鉱の渡辺祐策氏の言葉を引用されたことはすばらしかった。我々、資源のない国、日本は、科学技術によって、発展してきました。変な節約をするよりは、明日の資源を開発しなくてはいけないということです。変な節約に、ペットボトル、買い物袋、ごみ袋、紙のリサイクルなどのお話があり、真実は、政治と関係業者の癒着構造があるものもともいわれているというお話でした。

先生は、日本は、世界的に見ても、唯一温帯にある大きな島国であり、そこに住む日本人は、お金などの代償よりも、生きがいで働くという気風を持つ独特な人種であると話されました。つまり、職人気質により、伝承されてきた、独特の技術があるということです。IT革命、欧米化により、唯物論的、拝金主義がはびこって来た現代ですが、日本は、資源のない国なので、科学技術、つまり頭の良さで、生き残るしかないのです。

最後に、『愛用品の5原則』というのを挙げられました。詳しくは、本に書いていますが、愛用品を長く、自分で修理しながら使うのが、一番エコであるということのようです。安物買いの銭失いということでしょうか?日本の職人が作った、少し高いけれど、良い品を長く使えば、日本の職人も生き残れると思います。

また、最後に、物ではなく心の大切さも強調されました。そして、明るい社会、活力のある社会、若者が夢を持てる社会を目指そうということでした。ただただ同感でした。

（臼井記）

院長賞を受賞して

8A病棟看護師長　安藤　明子

院では毎年4月1日を開院記念日として式典が開催されます。各種賞状の授与、記念講演、院内清掃などが行われます。私が当院に配置された3年前にも当然同様の行事が開催され、院長賞を授与された方々を思い返すと錚々たるメンバーが名を連ねていました。私の中では皆さんとても優秀で「特別な人だけ」が院長賞を頂けるのだと思ったものです。

私にとって今回の受賞はまさに“棚からぼたもち”状態で思いもよらない光栄な事でした。私には院長賞にふさわしい立派な行動に思い当たるふしがなかったのですが、内容を伺ったとき初めて納得できました。それは、病床管理や看護研究、患者看護であり、いずれに於いても現場でのスタッフの頑張りの結果だと理解しました。私が病棟の代表として頂きましたが、このような形で認められた事を何よりもスタッフに感謝し、最前線で活躍するスタッフを誇りに思っております。心から嬉しく有難く感謝しております。今後も病院に貢献できるようにスタッフと共に精進していきたいと思います。本当にありがとうございました。

わが病院の"光るワザ"

循環器系特集

冠動脈ステント留置術 ―薬物溶出性ステント―

循環器科
宮地　克維

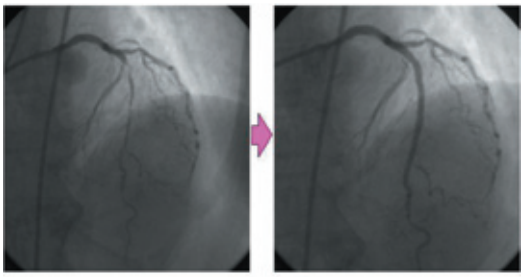
循環器の代表的疾患である虚血性心疾患（狭心症、心筋梗塞）。それに対する治療として、内科的にはカテーテル（直径2−3㎜程度の細い管）による治療：冠動脈インターベンション（PCI）が行われています。その中でも現在もっとも行われている方法が冠動脈ステント留置術です。動脈硬化で細くなった冠動脈を風船（バルン）で広げて、そこにステントという金網を血管の内側に留置します。この方法により、PCIの治療成績はそれまでのバルン拡張だけによる治療に比べて格段の向上を認めました。しかし、治療を行った20−30%の血管でステント留置後3ヶ月から半年でステント留置部に再度狭窄を来たす、ステント内再狭窄を起こし、繰り返し治療が必要になることが問題となっていました。ステント再狭窄はステントという異物が血管内に留置されることで血管内の細胞が増殖して、ステントの内側に盛り上がってくることが原因とされています。ステント再狭窄を予防するために、表面に細胞増殖を抑制する薬物を塗布したステント（薬物溶出性ステント）が開発され、その有効性が示されました。その再狭窄率は10%以下とされています。そして薬物溶出性ステントによる治療が我が国でも2004年より保険償還となり、現在2種類の薬物溶出性ステントが使用可能となっています。2007年度の当科における心臓カテーテル検査の件数は1633件、PCIは396件で、そのうち、ステント留置術は385件となっており、その93%に薬物溶出性ステントを用いています。高齢化社会の進行やメタボリック症候群の増加に伴い、虚血性心疾患が増加の一途をたどっています。これは急激に発症して一刻を争うこともまれではありません。そのため当科では常勤医師5名とレジデント5名計10名が診療にあたり、365日24時間対応いたしております。

心臓血管外科の紹介、最近の手術治療の紹介

心臓血管外科
岡田　正比呂

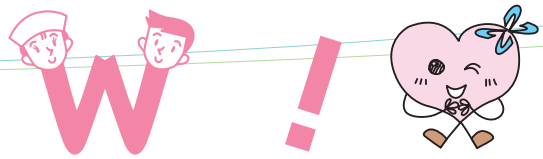
当院心臓血管外科は4名のスタッフとローテーションの研修医による診療体制となっています。スタッフは岡田（S58卒、成人心臓、

ステント



治療による改善

NOW!



循環器系特集

私たちは進化しつづけます

心臓血管外科術中写真

血管疾患）、中井（S59卒、成人心臓、血管疾患）、越智（S61卒、成人心臓、末梢血管、静脈疾患）、加藤（H5卒、成人心臓、小児心臓、血管疾患）の4名で、全員であらゆる領域の患者様を担当し診療にあたっています。循環器科、麻酔科、中央手術部等各科との合同カンファレンスを行い、万全の体制で手術治療が安全におこなえるようにしています。重症・救急患者様、高齢者の患者様に対しても手術が必要となれば手術を行っています。また、緊急手術に際しても各科スタッフの絶大なる協力のもとに夜間、土曜・日曜を問わず行われる体制ができています。

当院では各々の手術に対して下記のような取り組みをしております。

●心臓弁膜症の手術：僧房弁においては、可及的に自己弁を温存する弁形成術を行っています。動脈弁においては生体弁の使用が増えてきました。生体弁置換術後はワーファリンによる抗凝固療法が不要となってきます。これらの手術術式を選択することで術後の内服薬剤をずいぶん減らすことができています。

●冠動脈バイパス手術：標準的な人工心肺を使用した冠動脈バイパス手術から、低侵襲の人工心肺を使用しないオフポンプ冠動脈バイパス術を積極的におこなっています。術後の早期回復、退院が可能となってきています。

●大血管手術：胸部大動脈瘤、胸部大動脈解離に対しても脳保護の進歩、人工血管の改良により安全に行われるようになってきました。救急体制が確立されて、緊急手術症例にも対応しています。

●末梢血管手術：クリニカルパスの導入により質が高い医療と短期間の入院がなされています。

●下肢静脈瘤手術：侵襲の少ない麻酔、手術方法を選択しており、日帰り手術もしくは2-3日入院が可能となっています。

心臓、血管領域でお困りの患者様がおられましたら気軽に当院地域連携室もしくは当科スタッフに直接ご連絡ください。

心臓リハビリテーション

リハビリテーション科　西﨑　真理

当部門では現在常勤医師1名（心臓リハビリテーション指導士の資格を保有）と理学療法士1名の計2名にて入院および外来患者さまの心臓リハビリテーションを行っております。従来、心臓リハビリテーションは急性心筋梗塞後の運動療法として始まりましたが、その対象疾患は3年前の改定で急性心筋梗塞、狭心症、慢性心不全、開心術後、大血管疾患および末梢動脈閉塞性疾患にまで広がりました。当院でのリハビリエントリー数も年々増加し、昨年度は3500件を超えております。心臓リハビリテーションの目的は①身体的・精神的な機能を早期に改善させ社会復帰すること、つまり現在のQOL改善、だけではなく②疾患の再発・進展を予防すること、つまり生命予後の

循環器系特集

わが病院の"光るワザ"

改善にあることが大きな特徴です。

当院は2001年に、当初中国四国地方では数少ない施設認定をうけました。急性心筋梗塞では第2病日から受動座位を、また開心術後でもICU入室中の第2病日から呼吸訓練や廃用性症候群予防目的のリハビリが始まります。そして心肺運動負荷試験をおこない、その結果から出された運動処方に基づいた有酸素レベルでの運動療法を実施するとともに、日常生活指導、禁煙指導、カウンセリングなど包括的なリハビリテーションをおこなうことを常に念頭においております。また、以前は絶対安静とされていた心不全患者さまのリハビリテーションにも取り組んでいます。運動療法により血管内皮機能の改善や副交感神経の賦活化が報告されており、今後もその成果が注目されています。

心臓リハビリテーションでは心疾患患者さまが生き生きと元気な生活を送れるよう今後も努めていきたいと考えております。

リハビリテーション科スタッフ

私たちは進化しつづけます

淳ちゃんのワンポイント手話

手話にチャレンジ！

病院で役立つ一口手話

「花粉症は大丈夫？」

花
両手をあわせてすぼませた指を左右に開く。

におい・香り
手のひらを広げて自分に向け、それをすぼめながら鼻の頭にあてる

病気
握ったこぶしを額につけて、氷で冷やす仕草をする。

花粉症

大丈夫
右の親指以外の4本の指をくっつけて、指先を左胸、右胸の順にあてる。

「薬を飲んでいるから大丈夫。」

薬
左手のひらの上で右薬指をこねるように回す。

飲む
すぼめた手を口に入れるようにする。

大丈夫
右の親指以外の4本の指をくっつけて、指先を左胸、右胸の順にあてる。

私の趣味

ラクロス

理学療法士　今泉　正樹

私の趣味はラクロスです。

ラクロスは網のついた棒でボールをパスし、ゴールキーパーのいるゴールにボールを入れ、得点を競う球技で、カナダの国技です。日本ではまだまだマイナースポーツで特に中四国では一部の大学でクラブがある程度です。男子と女子では大きくルールが違うのですが、どちらもスピード感溢れる魅力的なスポーツです。

大学時代に私はプレーヤーとしてラクロスを始め、卒業後、岡山にきてからコーチを始めました。一般にコーチは20年やって一人前と言われるので、10年目の私はやっとコーチングの何たるかがわかってきたぐらいでしょうか。

写真は先日、私が所属する男子社会人チームの試合でのひとコマです。週末はこんな感じでラクロスに関わっています。

シリーズ 岡山医療センター物語 第9話

がんを体験して [4回連載] _part1

6A病棟入院　松浦　洋子

現在、がんは日本人の死亡原因の多くを占め、またかかる確率も非常に高くなっています。この様な現状の中、私もがんについて一般常識の範囲で充分に理解しているつもりでした。ところが肝心なことを認識していませんでした。それは私自身ががんになるということです。本当にうかつでした。

あと数ヶ月で五十歳になるというところで主治医の中西先生より六月のある日、がんの告知を受けました。「卵巣がんⅢ期」これが私の病名でした。術後、身体が少し楽になった午後のことでした。「こわい、私はどうしたらいいのだろうか」静寂の中、時が止まってしまったような感覚でした。告知について色々な考え方があるかもしれませんが、私は真実を知ることは良かったと思っています。夫は私に伏せてほしいと中西先生にお願いしたそうですが、先生の判断で告知ということになりました。このことについて、私はとても感謝しています。もし適当にはぐらかされていたら、何かおかしいと不信、不安で無駄なエネルギーを費やしてしまったり、看護師さんたちの言動に敏感になり信頼関係を保つことができなかったかもしれません。

「Ⅲ期」という現実にとてもとまどいました。「がん」という敵にどう向き合っていいのか心が乱れました。どう努力したらよいのか、どうがんばればよいのかがわかりませんでした。ただ生きていたい、治りたいという意志だけは、はっきりしていました。

不安と恐怖の最中決意しました。何も考えずただ

中西先生の背中だけを見ていこうと、上も下も西も東も見ないようにしようと。かすかに見える谷底の上にかかる揺れるかずら橋を（それも歩幅の大きい構造の）渡っているような気持ちでした。そして看護師さんたちに手を引いていただき、肩を支えていただいて一歩一歩渡っていきました。

看護師さんたちには、三ヶ月の入院中大変お世話になりました。色々な処置はもちろんのこと、かわされた会話で明るい気持ちになったり、励まされたり、退院して元気になったら地方都市の温泉に行ってみようと前向きな気持ちになりました。時にはおかしくておかしくてがんのことなどすっかり忘れてしまって笑いが止まらないこともありました。がんの治療中は「嘆くこと」も「悲しむこと」も簡単です。放っていても自然に嘆き悲しむことができます。「笑える」ことは本当にむずかしいことなんだと実感しました。その私が何度も笑ってしまいました。看護の力の偉大さというものを感じました。私は見守られているのだという気持ちが孤独感とは無縁になりました。家族はもちろんのこと、友人、知人のあたたかいはげまし、言葉で私は一人で戦っているのではないという実感が光のさす方向へと歩んでいけたのだと思っています。（次号へ続きます）

「がん相談支援センター始動しました」

がん相談支援センター　**藤原　慶一**（呼吸器科）

本年２月８日付けで当院は、地域におけるがん診療の中心を担う「がん診療連携拠点病院」に指定されました。その機能強化の一環として、がん相談支援を行う機能を有する部門である「がん相談支援センター」を当院に設置致しました。医師、看護師、医療ソーシャルワーカー、専属の相談員などのスタッフで構成されており、がん患者あるいはその家族の診療に対する疑問、不安に対するサポート、さらに医療に関する情報提供を目的としています。具体的には、1）がんの病態、標準的治療法など、がん診療に関係する一般的な医療情報の提供、2）地域の医療機関や医療従事者に関する情報紹介、3）セカンドオピニオンの提示が可能な医師の紹介、4）患者の療養上の相談、5）医療費に関する相談、6）アスベストによる肺がん及び中皮腫に関する医療相談、7）緩和医療に関する相談、などを受け付けております。直接相談窓口に来ていただくか、あるいは電話にて対応致します。また、地域の医療従事者からの相談も受け付けております。相談時間はお一人様30分を基本として、相談料は必要ありません。スタッフ一同、親身な対応を心がけますので、是非ご利用下さい。

［病院活動案内］

地域医療研修室　セミナー・講演会（6月～9月）会場/当院4階大研修室　時間/19:30~20:30

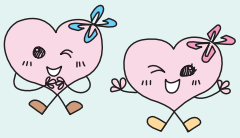
日　程	種　別		演　者	
6月17日（火）	初期治療セミナー	頭痛の診療	当院脳外科医師	青井　瑞穂
7月8日（火）	薬剤師研修会初期治療セミナー	乳がん治療の現況	当院外科医長	臼井　由行
7月15日（火）	初期治療セミナー	腸閉塞の診断と治療	当院外科医師	國末　浩範
7月24日（木）	講演会	多発性骨髄腫の診断と治療	当院血液内科医長	角南　一貴
9月16日（火）	初期治療セミナー	疼痛管理とオピオイド	当院呼吸器科医師	藤原　慶一
9月25日（木）	講演会	ここまでできるIVR	当院放射線科医師	向井　　敬

●早春コンサート～和む音薬を～●

ボランティア室　山本　喜志恵

春らしい風の吹き始めた3月13日（木）午後6:30～8:00に、「赤磐弦楽愛奏会」によるコンサートを開催しました。バイオリン、ビオラ、チェロ、コントラバスによる弦楽四重奏曲のクラシック音楽と美しい歌声で始まり、入院中の患者様や外来の観客、職員をうっとりとさせていました。司会を担当された三村勉さんのユニークで楽しいトークにも惹きつけられました。途中、特別出演で「ドジョウ掬い」があり、ユニークな振り付けに大笑いの時間でした。さらにコンサートは続き、なじみのある「花」「早春賦」「故郷」など、患者様も一緒に口ずさみ楽しいひと時を過ごすことが出来ました。

このタイトルの「音薬」は「音楽を薬に代えて届けたい」という気持ちで、「感謝を込め和む音薬を届けたい」と書かれています。司会の三村様は当院に通院中の患者様でとても明るく希望をもって日々を躍動的に送っておられます。私たちもこの力を受けて、もっと「人にやさしい」、素敵な時間を過ごしていきたいと感じたひと時でした。



国際医療協力室からのお願い

Information

当院では、日本語のわからない外国人の患者さまが、当院の外来を受診されたり、入院となった場合に、医療通訳のシステムを整備しつつあります。英語のできるかたは、スタッフにも多く、大体確保できているのですが、英語以外の言葉、たとえば、中国語、ハングル、ポルトガル語、ベトナム語、フィリピン語、フランス語、ドイツ語の通訳スタッフが不足しています。当院の、医療通訳サポーターとして、登録、活動してみたい方は、下記までご連絡ください。

岡山医療センター　地域連携室または国際医療協力室まで

編集者から●あとがき

世界では、四川大地震、ミャンマーのサイクロンなどの大規模な天災や、チベット騒乱、アメリカ大統領予備選での黒人候補勝利など、世の中に変化を求める人々のエネルギーの蒸気が噴出しているようです。国内に目を移せば、中国餃子問題、後期高齢者医療制度、年金疑惑などなど、安全、安心、思いやり、信頼関係といった、日本人がかつて世界に誇ることのできた価値観・道徳観といったものが地滑りのように崩れていくのを目の当たりにし、嘆息せずにはおれません。勤務医の疲弊、救急コンビニ化に代表される急性期医療を取り巻く社会環境も厳しさを増しています。当院は、『人にやさしい病院』を理念に掲げ、地域医療支援病院の指定に続いて、がん診療連携拠点病院に認定されました。病める人々のみならず、働く女性や職員、地域住民にもさらに「やさしさ」を広げていくべくチャレンジし続けることが使命であろうと思います。広報誌『ザ・ジャーナル』も3年目に入りました。マンネリ化のリスクは避けられませんが、サブタイトルの「やさしさ便り」が形骸化しないよう、「真心」込めた紙面づくりを目指し、チャレンジしていきたいと思います。（大森　記）

ザ・ジャーナル!!
第3巻　第1号
平成20年5月25日発行（年4回発行）
編集責任者　大森信彦
独立行政法人 国立病院機構
岡山医療センター 地域医療連携室
広報誌編集チーム
〒701－1192　岡山市田益1711－1
Tel.086-294-9911 Fax.086-294-9255
印刷：山陽印刷㈱